昼見れど飽かぬ田子の浦大君の命畏み夜見つるかも

田口益人

『万葉集』巻三「雑歌」収載。詞書「田口益人大夫、上野の国司に任けらゆる時に、駿河の清見の崎に至りて作る歌二首」の二首目にあたる作。『続日本書紀』によれば、田口朝臣益人は、和銅元年（七〇八）三月十三日に、従五位上で上野守になっており、その道中の歌と思われる。「昼間よく見ても見飽きることのない田子の浦、この田子の浦を、大君の命のままに旅する身とて、夜見て通ることになってしまった」の意。

律令の施行細則をまとめた平安時代中期の法典『延喜式』によると、上野と京都との間を行き来するのにかかる日数は、上り二十九日、下り十四日と見積もられている。限られたスケジュールゆえ、田子の浦を昼間ゆっくり眺める猶予がないのを嘆くことで田子の浦の素晴らしさを持ちあげたものと思われる。田子の浦が富士を望む景勝であったことは、のちの山部赤人の一首によっても知られる。

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける

山部赤人

犬養孝『万葉の旅』によれば、万葉集全体で延べ二九〇〇もの地名が登場するという。律令国家の中央集権制において、中央と地方を権力と情報によって結んだのは公務を負った多くの旅人であった。彼らの旅をつかの間癒やしたのは先々で出合う美しい景色だったことだろう。しかし、日程に縛られていたために掲出歌のような事態が発生し、落胆の歌が生まれることとなった。

早来ても見てましものを山背の多賀の槻群散りにける

かも

高市連黒人

「もっと早くやって来て見たらよかったのに。山背の多賀のもみじした欅、この欅の林はもうすっかり散ってしまっている」。「山背の多賀」は現在の京都府多賀と見られ、北陸か東国かの帰路の詠と考えられている。

いかにも旅らしく景色を愛でる歌もいいけれど、これら旅先での落胆の歌も別の味わいがある。

（小島なお）